

□ 次の問いに答えなさい。

問一 — 部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 葉が効いてホツとした。
- ② 弁護士を志している兄。
- ③ 険しい表情をした父。
- ④ 足りない金額を補う。
- ⑤ 快い返事をくれた。
- ⑥ 人生を安易に考えてはならない。
- ⑦ 新しいチームの監督に就任した。
- ⑧ 過去にない損失を計上する。
- ⑨ 明朗な会計で安心した。
- ⑩ 出火の原因を推定する。

問二 — 部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① おびただしい数の人がムラがっていた。
- ② 垣根から木のエダがはみ出している。
- ③ 湿度をタモつ機能があるエアコン。
- ④ 情報にカコまれて生きている。
- ⑤ 失敗してシタを出す。
- ⑥ 今度の試合はゼツタイに負けられない。
- ⑦ 将来、アメリカにリュウガクしたい。
- ⑧ シジする政党が選挙で大勝した。
- ⑨ 国際的な組織にカメイする。
- ⑩ メールでガソウを送る。

□ 「ばあちゃん」(「真崎先生」)の孫である「光一」は、ばあちゃんの教え子である空手家の「白壁館長」に勧められて「立禅」を行っています。次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

そのとき、白壁館長が「あははは」と乾いた笑い声を出した。

「あと、どれくらいやらされるんだって思ってるでしょ」

素直に答えていいんだろうか。脚も腕もぶるぶると勝手に震えてる。やばい……。

「ええ……どれくらいの時間、やるもんなんですか」

「真崎先生は、どれくらいおやりになってますか」

「今は三十分ぐらい、やるようにしてるわよ」

「おお、三十分はすごい。うちの、かなり鍛えてる練習生でも、最初は十分に全身がぶるぶる震えて形にならなくなっちゃいますよ。先生のお年で三十分もできる人は世界中を探しても、そういないんじゃないですかね。女性ではきつと先生だけでしょね」

「白壁さんが無理しないで、こつこつ続けることが大切だって教えてくれたから、できるようになったのよ。最初は三分ぐらいから始めて、とにかく嫌にならないように、無理をして時間を延ばそうとはしないで、とにかく毎日続けることだけを守ったの。」(A)薄い紙も、重ねてゆくと、いつかは分厚い束になるものよね」

ばあちゃんは、あまり無理しなくても三十分もできる？ にわかには信じがたいことだった。とうとう額の汗が流れてきて、左の目に入った。両ひざがさらに激しく、がくがくと震えて、肩はまるで鉛の塊でも持っているように重い。勘弁してくれー。

白壁先生が噴き出して「もういいですよ、休憩しましょう。先生がおっしゃるとおり、無理するとなかなか続きませんから」と言い、先に両腕を下ろした。

本当にやめていいんだな。いいって言ったよな。

光一は両腕を下げて、たまらずソファに座り込んで、大きく息をついた。白壁館長がにやにやしている。怒り出しそうな雰囲気ではない。助かった。

それにしても、これを毎日、何年も続けるのって、途方もないことだろうな。

でも、こつこつ続ければ、年を取っても元気でいられるのか。

ばあちゃんも、白壁館長も、もともとの「B」ポテンシャルが違うから続けられるんだろう。

でも、自分なんかでも、こつこつ続けたら、少しずつ伸びてゆくのかな。そして、いつの日か、気の力とやらを実感できる 때가くるのだろうか。

空手の稽古は、突かれたり蹴られたりして大変そうだけれど、これだったら、少しずつ頑張ればいいだけ。できるかもしれない。

すると、ばあちゃんがにっこり笑って、「光一さんも、よかつたら立禅だけでもやってみたらどう？ 続けていると、それが当たり前になって、別に辛いつてもなくなるのよ」と言った。

光一は、自分の祖母がただ者ではないらしいことに、確信を持ち始めていた。

①この人は温厚で頑健なだけでなく、心の中を読む力も持っている。

帰りは、白壁館長が運転するバンで駅まで送ってもらった。案の定、何かスポーツはやっているのか、とか、空手をやってみる気はないかと聞かれたので、高校はハンドボール部だったけれど運動神経があまりよくなって補欠だったこと、空手に興味がないわけではないが今は浪人中なので、と答えておいた。白壁館長は察してくれたようで、それ以上しつこく勧誘はせず、その気になればいつでも来てね、と言った。

列車は混雑していた。大半は、駅の近くにある予備校やビジネス専門学校の学生たちだろう。ばあちゃんは、またもや、腰を曲げて辛そうな演技を始め、席を譲ってくれた若い男性に礼を言い、降りるまでの間、その男性が、ビジネス専門学校に通っていて、まずは取りやすい資格をいくつか手にした上で、税理士の資格を目指している、といった身の上話を聞き出していた。ばあちゃんは、相手を質問攻めにするようなことはせず、先に自身のことを話すことで、相手の口を滑らかにしているようだった。

②ばあちゃんは他人をコントロールするのが上手い、したたかな人間なのだろうと思っていたのだが、それは半分当

たりで半分外れらしいと思った。

ばあちゃんは、他人の潜在能力を引き出すのが上手い人なのだ。そのためなら多少のうそをついたり、演技をしたりもするけれど、それは自分の利益のためではない。優しいうそをつける人なのだ。

現に、この専門学校生も、結構うれしそうに、生き生きと夢を語り始めている。赤の他人だからこそ、話せることもある。ばあちゃんは、目を細めて彼を見上げ、いかにも頼もしそうに相づちを打っている。

光一はさらに、こんな仮説も立ててみた。

ばあちゃんは、家が貧乏だとか、家庭の事情が複雑だとか、そういった問題を抱えている子供や若者を、独特の嗅覚でもって気づく能力があるんじゃないか。昨日と今日の間に出会った元教え子の人たちはみんな、多かれ少なかれ、かつてそういう事情があった様子である。ばあちゃんは彼らに対して、施しをするのではなく、いかにも困っているふりをして手伝って欲しいと頼み、「お陰で助かったわ」と大袈裟に喜んでほめて、お礼にと、おにぎりやおかずを振る舞ったり、月謝を払わなくても済むようにしたりするのだ。

「おながが空いてるようだからあげる」「おカネがないのなら代わりに仕事を手伝って」というストレートなやり方でも、それなりに相手から感謝されただろうけれど、ばあちゃんのように順番を入れ換えるだけで、相手の自尊心を傷つけることがないし、やる気も増すというものだ。(中略)

そして元教え子の人たちは大人になって気づくのだ。ばあちゃんが実は、優しいうそをついてくれていたことに。③

そのことで余計に敬愛の念は強まるのだ。

専門学校生の男性は、光一たちよりも手前の駅で「ではここで」と会釈した。ばあちゃんが「親切にしてください、ありがとうございます。それからいい話も聞かせてください。お互い、頑張りましょうね」と片手を出し、彼は両手で握ってから、いいことをしてよかった、という満足げな表情でうなずいて、いなくなった。

やり取りを聞いていたらしい、周囲にいた若者たちも、いい時間を共有したな、みたいな表情になっていた。

(山本甲士 『ひかりの魔女』)

問一 ……線部(A)と(B)について、次の問に答えなさい。

問A ……線部(A)の内容を表した慣用句としてふさわしくないものを答えなさい。

ア、ローマは一日にして成らず

イ、塵も積もれば山となる

ウ、三人寄れば文殊の知恵

エ、石の上にも三年

問B ……線部(B)の「ポテンシャル」ということばを正しく使った文を答えなさい。

ア、我々は国際平和の実現に対して引き続きポテンシャルしていく。

イ、あのギター演奏は目新しく芸術的なポテンシャルだった。

ウ、自動運転技術は時代を変えるポテンシャルを持っている。

エ、ポテンシャルな視点から経済を分析する。

問二 ――線部①について、なぜ「ばあちゃん」が心の中を読むことができるか。「光一」は考えているのですか。その理由を三十字以内で答えなさい。

問三 ――線部②にある「したたか」は、「しぶとい」や「しっかきりしている」の他に「計算高い」という意味もあります。「ばあちゃん」の「計算高い」様子を二十字程度で説明しなさい。

問四 「ばあちゃん」が言うであろう発言としてふさわしいものを答えなさい。

ア、「秀明くんは広幸くんより絵が上手だから、代わりに年賀状を描いてくれると助かるんだけどな」

イ、「秀明くんは絵を描くのが上手いから、代わりに年賀状を描いてくれると助かるんだけどな」

ウ、「絵の上手な秀明くんだからこそ、代わりに年賀状を描いてくれると助かるんだけどな」

エ、「私は絵を描くのが苦手だから、代わりに年賀状を描いてくれると助かるんだけどな」

問五 「ばあちゃん」が言う「優しいうそ」は具体的に何をすることですか。解答用紙にしたがって十一字でぬき出しなさい。

() をすること。

問六 ――線部③について、なぜ「敬愛の念」が強まるのですか。ふさわしいものを答えなさい。

ア、問題を抱えている子供や若者の潜在能力を引き出し、誇りを持たせてくれたから。

イ、自然と夢を語り始めることで進むべき道に気づき、その夢をかなえられたから。

ウ、「ばあちゃん」のストレートなことばで、正しい道を歩むことができたから。

エ、「ばあちゃん」がほめてお礼をしてくれたおかげで、やる気が増したから。

三 次の文章を読み、後の間に答えなさい。

自分たちとはちがうくらしをしている人たちの存在を知ったその瞬間から、遠い国のその人たちは、もうわたしたちの見知らぬ人ではありません。それ以前にはなにひとつ知らなかった相手であったとしても、その人たちが同じ地球上で同じ時を生きていることを知った瞬間から、自分とつながりのある存在として、その人たちをもう無視して過ごすことはできない。ほんとうはそうであるべきなのです。

「知る」ということは、じつはこんなに重い意味を持っているのです。知ったからには、知ったことに対して責任が生まれます。なんらかの働きかけも求められるのです。

「そんなめんどうなことになるのなら、知らなきゃよかった」

なんていわないでくださいね。新しいなにかを知ることが喜びでもあるでしょう？ でも、きみのいうように、知ってうれしくないこともたくさんあります。それでも、うれしくないことやめんどうなことであっても、一度知ってしまったら、もう知らなかったことにしてしまうわけにはいきません。

ことばや、肌の色や、住んでいるかんきょうはちがっても、傷つけられれば痛いし、家族をうしなえば悲しいという、わたしたちと同じ人間の存在をきみは知ったのです。

だから、たとえ遠い国の人たちがわたしたちのことをまるで知らなくとも、わたしたちのほうはもうその人たちを知ったのですから、知ったことによって生まれる責任を負わなければならないのです。

終戦をむかえた六十年前、いまでは老人となった若いころのわたしたちはその多くが、家も家財のいっさいも、そして家族のだれかれをもうしなっていました。

戦争が終わって、もう空襲におびえて過ごす日はなくなっただけでも、その日からすぐに戦争以前のおだやかな生活が返ってくるわけではありませんでした。わたしたちの手には、もうなにも残っていないからです。

だれかが、たとえば国が、みんなに手をさしのべてくれるわけでもありませんでした。そんなよゆうは、だれにもなかったのです。

家も、食べものも、着るものも、なにもかもをうしなった状態で、とにかくわたしたちは生きていかなければなりませんでした。それは、すさまじいことでした。

ただ、そのすさまじく苦しかった日々のなかにも、わたしたちにとってさいわいだったことがあります。

それは、戦争でうしなうまでは「そこにあることがあたりまえ」だと思っていたもの、家族や、だんらんや、しあわせや、のんびりとした時間や、あたたかい食事や、けんかのできる兄弟姉妹や、人の情けや思いやりや、そのほか数えあげればいくらかでもあるごくありふれたものが、じつはどれもかけがえのないものであったことに気づくことができた、ということなのです。

戦後の食糧難のときには、家族に食べさせるものをもとめて、わたしも列車に何時間もゆられて買い出しに出まし

た。

買い出し先の埼玉さいたまけんのある農家の縁側えんがわでいただいた、わずかばかりのつけものの、なんとおいしかったことでしょう。住んでいるかんきょうはちがっても、おたがいに苦しい生活を送る者同士であっただけに、その心づかいがわたしには身にしみてありがたく感じられました。

いのちにしがみつくようにして生きていく日々のなかで、人からなにかをいただくたびに、人の「(A)コウイにふれるたびに、わたしたちはそのありがたさを実感しました。思いやりを示してくれる相手の気持ちの深さを思い、その人の置かれている状況じょうきょうをおしはかつて、感謝の思いをいつそう深くしていたのです。

人々のうえにお日さまが照ることも、雨が大地をうるおすことも、夜が来てまた朝がめぐってくることも、みなありがたく感じていました。

そうして日ごとに、うしなうものよりも新しく得るもののほうがふえていき、だんだんくらし向きがよくなって、わたしたちのくらしにはすこしずつゆとりが生まれてきました。

それは、わたしたちが自分の子や孫たちのために望んだ生活でもありました。食べものや着るものに不自由しないゆたかさを手に入れさえすれば、戦争以前のおだやかな生活にもどれると、わたしたちは思っていたのです。

けれど、どうやらそこに思いちがいがあつたようです。

わたしたちは、つましい生活のなかにある小さなしあわせをも実感できていたのに、ゆたかさを追い求めるように

なつてから、その（B）をにぶらせてしまいました。あれほどありがたいと感じていたものたちからありがたみが消えて、どれもみなそこにあることが当然だと思ふようになってしまったのです。それとともに、ほかの人のことをおもんばかり想像力もおとろえてしまいました。

おもんばかり感じておとろえて、その代わりに、まるでコンピュータが情報を処理するようになんの感情も入れずにもものを見るようになったみたいだと、わたしは感じています。

さつきもお話したように「知る」という行為は想像力や思いやる力を同時にはたらかせながら行うものです。けれど、いまわたしたちがしている「知る」のなかにはぬくもりがありません。ただ情報として処理しているだけです。

そうなると、どんなにたくさんニュースをテレビや新聞で見聞きしても、見知らぬ人の話はどこまでも他人事たにじしかありません。

「ほかの人の痛みは、その人の痛みであつて、わたしにはまるで関係がない」

と思うことになれてしまえば、たとえば戦争も「ここ」にないかぎり、自分が解決に乗り出すべき問題として自覚されることさえなくなつてしまいます。

問一 ……線部(A)と(B)について、次の間に答えなさい。

問A ……線部(A)「コウイ」を漢字で書いた場合、もつとふさわしいものを選びなさい。

ア、厚意 イ、行為 ウ、更衣 エ、高位

問B (B)に入ることを選びなさい。

ア、シグナル イ、チェック ウ、センサー エ、レーダー

問二 筆者は敗戦によって得たことは何だと考えていますか。二十字程度で答えなさい。

問三 筆者の考える「知る」にふさわしいものを選びなさい。

ア、情報と情報とを結び付け、新しい価値を創造すること。

イ、なるべく多くの正しい情報を収集し、記憶にとどめること。

ウ、必要な情報を取捨選択し、詳しく理解しようと努力すること。

エ、ひとつの情報を基にして推し量ったり、思いをめぐらせること。

問四 なぜ埼玉県の農家の人は筆者につけものをあげたのですか。解答用紙にしたがって十字程度で答えなさい。

() と、おもんばかったから。

問五 日本が戦争に巻き込まれるのを防ぐため、国と国とのいざこざに際し、筆者はどのような態度で臨むことを訴えていますか。解答用紙にしたがって四十字程度で答えなさい。

() と、という態度。

問六 アフリカに「シオラレオネ」という国があります。WHO(世界保健機関)のデータによると、二〇一三年の時点で内戦や貧困、感染症などで平均寿命が四十六歳という世界で最も短い国とされています。このことを知って、今のあなたはシオラレオネに対してどのような働きかけをしますか。今のあなたにできることを考えて答えなさい。

